

邯鄲

古名

邯鄲枕

又

盧生

世阿弥作

シテ 盧生

狂言 宿主

ワキ 勅使

ワキヅレ (大臣) 官人

子方 舞人

地は 唐土

季は 雑

シテ次第
「浮世の旅に迷ひきて。く。夢路をいつと定めん。

サシ
「是は蜀の国のかたはらに。盧生といへるものなり。

詞
「われ人間にありながら仏道をも願はず。たゞ茫然
と明かし暮らすばかりなり。誠や楚国の羊飛山に。
貴き知識のましますよし承り及びて候ふ程に。身
の一大事をも尋ねばやと思ひ。只今羊飛山へと急
ぎ候。

道行
「住み馴れし。国を雲路のあとに見て。く。山又

山を越えゆけば。そことしもなき旅衣。野暮れ
山暮れ里くれて。名にのみ聞きし邯鄲の。里にも
はやく着きにけり。く。

シテ詞
「急ぎ候ふ程に。是は、や邯鄲の里に着きて候。未
だ日は高く候へども。此所に旅宿せうずるにて候。

シテ詞
「いかに案内申し候。

狂言
「シカく。

シテ
「是は旅人にて候。一夜の宿を御かし候へ。

狂言「シカく。」

シテ「是は蜀の国のかたはらに。廬生といへる者なり。われ人間にありながら仏道をもねがはず。たゞ茫然とあかしくらすところに。楚国の羊飛山に。たつとき知識のまします由承り及びて候ふ程に。身の一大事をもたづねばやと思ひ立ちて候。」

狂言「シカく。」

シテ「さて其枕はいづくに御座候ふぞ。」

狂言「シカく。」

シテ「さらば立ち越え一睡見うずるにて候。」

狂言「シカく。」

シテ「さてはこれなるが聞き及びにし邯鄲の枕なるかや。是は身を知る門出の。世のこゝろみに夢の告。天のあたふる事なるべし。」

歌「一村雨の雨やどり。」

地「一村雨の雨やどり。日はまだ残る中宿に。仮寝の

夢を見るやと。邯鄲の枕に伏しにけり。く。

ワキ詞 「如何に廬生に申すべき事の候。

シテ詞 「そもいかなる者ぞ。

ワキ 「楚国の帝の御位を。廬生にゆづり申さんとの。勅使是まで参りたり。

シテ 「思ひよらずや王位には。そも何ゆゑにそなはるべき。

ワキ 「是非をばいかではかるべき。御身代をもち給ふべ

き。其瑞相こそましますらめ。はやく輿にめさるべし。

シテ 「こはそも何と夕露の。光りかやく玉の輿。乗りも習はぬ身のゆくへ。

ワキ 「かゝるべきとは思はずして。

シテ 「天にもあがる。

ワキ 「こゝちして。

地 「玉の御輿に法の道。く。栄花の花も一時の。夢

とは白雲の。上人となるぞ不思議なる。有難の気色やな。く。もとより高き雲の上。月も光はあきらけき。雲龍閣や阿房殿。光も満ちく。て。げにも妙なる有様の。庭には金銀の砂を敷き。四方の門辺の玉の戸を。出で入る人までも。光を飾るよそほひは。誠や名に聞きし。寂光の都喜見城の。たのしみもかくやと。思ふばかりの気色かな。千顆万顆の御宝の。数をつらねて捧物。千戸万戸

の旗のあし。天に色めき地にひく。籟の声もおびたゝし。く。

シテ「東に三十余丈に。

地「白金の山を築かせては。黄金の日輪を出だされたり。

シテ「西に三十余丈に。

地「こがねの山を築かせては。しろかねの月輪を出だされたり。たとへばこれは。長生殿の内には。春

秋をとゞめたり。不老門の前には日月遅しと。言
ふ心をまなばれたり。

大臣詞

「如何に奏聞申すべき事の候。御位に即き給ひては
早五十年なり。然らば此仙薬をきこしめさば。御
年一千歳まで保ち給ふべし。さる程に天のこんづや
かうがいの盃。これまで持ちて参りたり。

シテ詞

「そも天のこんづとは。

大臣

「是れ仙家の酒の名なり。

シテ「かうがいの盃と申す事は。

大臣詞

「おなじく仙家の盃なり。

シテ「寿命は千世ぞと菊の酒。

大臣

「栄花の春も万年。

シテ

「君も豊かに。

大臣

「民さかえ。

地

「国土安全長久の。く。栄花もいやましに。なほ
喜びは増り草の。菊の盃とりぐに。いざや飲ま

うよ。

シテ「めぐれや盃の。

地「めぐれや盃の。流れは菊水の。流に引かれて疾く
過ぐれば。手まづ遮る菊衣の。花の袂をひるがへ
して。差すも引くも光りなれや。盃の影の。めぐ
る空ぞ久しき。

子方「わが宿の。

地「我宿の。菊の白露今日ごとに。幾世つもりて淵と

なるらん。よも尽きじよも尽きじ。薬の水も泉
なれば。汲めどもく。いやましに出づる菊水を。
飲めば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛
び立つばかり有明の。夜昼となき楽しみの。栄花
にも栄耀にも。げに此上やあるべき。(楽)

シテ「いつまでぞ。栄花の春も常盤にて。

地「なほ幾久し有明の月。

シテ「月人男の舞なれば。雲の羽袖をかさねつゝ。よろ

こびの歌を。歌ふ夜もすがら。

地「うたふ夜もすがら。日はまた出で、明らけくなりて。夜かと思へば。

シテ「昼になり。

地「昼かと思へば。

シテ「月又さやけし。

地「春の花さけば。

シテ「紅葉も色こく。

地「夏かと思へば。

シテ「雪もふりて。

地「四季をりくは目のまへにて。春夏秋冬万木千草も。一日に花さけり。面白や不思議やな。かくて時過ぎ頃されば。く。五十年の栄花も尽きて。誠は夢の内なれば。皆消えくと失せ果て。有りつる邯鄲の枕の上に。眠の夢はさめにけり。

シテ「廬生は夢さめて。

地「廬生は夢さめて。五十の春秋の。栄花もたちまちに。たゞ茫然と起きあがりて。

シテ「さばかり多かりし。

地「女御更衣の声と聞きしは。

シテ「松風の音となり。

地「宮殿楼阁は。

シテ「たゞ邯鄲の仮の宿。

地「栄花のほどは。

シテ「五十年。

地「さて夢の間は粟飯の。

シテ「一炊の間なり。

地「不思議なりや測りがたしや。

シテ「つらく／＼人間の有様を案ずるに。

地「百年の歡樂も。命終れば夢ぞかし。五十年の栄花こそ。身の為には是までなり。栄花の望も齡の長さも。五十年の歡樂も。王位になれば是までなり。

げに何事も一炊の夢。

シテ
「南無三宝南無三宝。」

地
「よくく思へば出離を求むる。知識はこの枕なり。

げに有難や邯鄲の。く。夢の世ぞと悟り得て。

望かなへて帰りけり。